

現象学

木田元
岩波 1970

現象学とは何か

- 12 カント：感性的知識の原理の妥当性と限界を決定すべき学が「一般的現象学」と呼ばれるべきである。後にこれは純粋理性批判と呼ばれている。
- 13 フッサールがこの概念を直接受け継ぐのはブレンターノからである。「記述的心理学 = 内的経験に基づいて、心理現象を組成する窮極的な心的要素を記述的に明らかにすること。記述学」という意味の現象学の概念は当時の講壇哲学ではかなり慣用的に使われていた。

1 フッサールの時代の思想的状況

- 17 現象学を提唱して以降のフッサールの思想は三期に分けて考えてよい。一貫したモチーフは「実証主義的風潮に対する批判」である。

- 19 Edmund Husserl は 1859 現チェコ領ブレスニツに生まれた。心理学主義的な考えから出発して数学の基礎付けを出発点とした。心理学主義は数学的思考や論理的思考も経験的存在である人間の心理現象の一種なので先天的観念の客観的妥当性の心理学的基礎の解明を通じて諸科学の基礎付けをすることが出来るという立場。フッサールはワイエルシュトラスとクロネッカーの間の基数序数論争に決着を付けようとした。

- 22 しかし、次の「論理学研究」(第一巻)でこの種の考えに徹底した批判を加えることとなった。ここで論理学とは「すべての学問的認識を学問的認識たらしめる形式的諸条件についての研究」のことである。当時の他の人々(フレーゲなど)と同じく彼も純粋集合論をその一部とする純粋論理学を構想していた。

- 24 フッサールの批判の要点は、如何に帰納を積み重ねてもそれは結局経験的な普遍化に他ならず、そこに得られる法則は蓋然的のものでしかない、それから例えば「矛盾律」のような論理法則の必然性がいかにして生じうるであろうか。これは帰納によって確認されるものではなく、ア・プリオリな明証をともなって洞察されるものである。イデア的連関は実在的連関から導き出すことは出来ない。

- 26 さらに、彼の心理学主義批判はさらに、人類という種の特殊な認識機構から導き出そうとする「人間学主義」や、あるいは生物の目的論的名手既往の原理によって説明しようとする「生物学主義」などイデアをリアルと結びつけるすべての試みの批判におよんだ。「もしそうなら一切の認識は必然的な統一性は持えないことになり、真なる認識の組織としての学問は成り立ち得なくなる結局、心理学主義の主張そのものも学問的認識として成り立ち得なくなる。結局、極度の懐疑論に陥ってしまうことになる。」

フッサールは真偽の絶対的区別がなし得ると確信し、論理的法則のア・プリオリな必然性や理論の持つ統一性を、認識作用の実在的主観的連関とは原理的に区別される認識内容のイデア的客観的連関に見て、その固有の権利を確立し。このような「学問一般のイデア的な可能性の諸条件の学であり、あるいは理論というイデアのイデア的構成要素についての学である純粋論理学」を提唱した。
この提唱は、心理学主義、主観主義への痛烈な批判として、また客観主義哲学の新たな基礎付けとして、高い評価を受けた。

29 では主観的な論理体験と客観的なイデアの対象性との相関関係をどうなっているのか？その
31 ためにフッサールが援用するのが、ブレンターノから学んだ志向性 Intentionalität の思想で
ある。彼は意識はすべて「何ものかについての意識」であるという意識の基本的性格を「志
向性」という概念で捉え、これを考究することで、認識作用の主観性と認識内容の客観性と
を橋渡そうと考えた。

32 この時期、彼は实在論に立っていたから、イデアの対象がわれわれの主観的な心理的体験に
34 いかんして与えられるか、ということが問題であった。つまり、イデア的存在に固有の与えら
れ方、それに固有の知覚の仕方があると考え、心理主義への反動として過度にプラトン主義
的ないし論理主義的になった。イデアの意識概念が依然として経験主義的であったと言える。

II 超越論的現象学の展開

35 1910:「厳密な学としての哲学」。これは彼の中期の思想の出発点を告げる「現象学宣言」で
38 あった。これは当時支配的であった歴史主義と自然主義に対して真正面から批判を加え厳密
な学的哲学の確立を説くプロパガンダであった。

ここで「学」Wissenschaft とは窮極的な根拠を持つ知識の体系のことであり、「精密度なり
有効性なりの比較的高い知識」というような程度のものではない。

39 フッサールの考えでは、ヘーゲル以来の19世紀の思想的動向は、方法的抽象に基づく数学
的「精密化」であり、詩歌もこれのみを唯一可能な存在開示と見る方法的仮定によって、
40 本来無仮定であるべきはずの学の理念を変造している。
しかし、イデア的なものを経験的自然法則と見ることはそうした思惟法則にしたがう自然主
義の主張そのものがその真理性を主張し得ないことになり、一種の自己否定に陥る。

[COMMENT] これは本当か？ Darwinism 的立場では外界との意識の妥当性は意
識の存在前提である。妥当しなければ存在しないという主張は経験的主張であ
る。そしてこの主張は自己無撞着であるというのが経験的主張である。これは真
理性の表明ではない。しかし、「首を切られれば死ぬ」というのは経験的主張に
すぎないのか。例外はあり得ないように世界は出来ている。これ以上の真理性の
表明に意味があるのか？

41 フッサールは自然科学的方法には、自然を客観的所与として素朴に前提してかかる自然発
生的な習慣、つまり「自然的態度」が潜んでいることを見抜き、それに「現象学的態度」を鋭
く対比させようとする。

43 経験的事実についての一定の仮定の上に立って学の理念を変造したり弱体化したりするこれ
らの誤った実証主義に対して、一切の仮定を排して絶対的に明確な端緒から出発する自らの
現象学を「真の実証主義」と呼び、これによってのみ「厳密な学としての哲学」の建設が可
能になる。

フッサールにこれほどの自信を与えたものは「現象学的還元」の思想である。1907年の「現
象学の理念」ではこの思想ははっきりと打ち出されている：「自然的認識」の謎は、意識を
越え出た超越的存在者を「あり」とする断定、言い換えれば、認識するとうの主体に真の意
味で与えられてはいない対象や自体を「ある」と決めてかかる断定に存する、こうした超越
的断定の保留を「現象学的還元」と呼んでいる。意識体験に絶対的明瞭さを持って与えられ
る内在性の場面、つまり純粹現象が得られるが、ここに固執して認識批判を行おうというの

が彼のいう「哲学的態度」なのである。

44 「イデーン」第一巻に見られる彼の成熟した中期の思想を特徴づけるものは「超越論的」という概念である：意識の素朴な「自然的態度」に対して「超越論的還元」が加えられ、「超越論的態度」が得られる。それによって開かれる意識が「超越論的意識」であり、この態度に立つ哲学が「超越論的現象学」である。

45 世界を「あり」と素朴に断定し、「世界内的」に生きるということが自然的態度の基本的性格である（「自然的態度の一般的定立」）。自然科学もこの延長上にある。

46 しかし考えてみれば、こうした断定には何の根拠もない。絶対に無仮定であろうとする哲学は、到底こうした仮定に甘んじることは出来ない。そこで世界の存在についての確信にストップをかけ（{括弧に入れて}）、逆にわれわれに直接与えられる意識体験からいかにしてそのような確信が生じてきたかを見ようとするのが、超越論的還元である。「世界を越えて世界の根元を問う」のである。

[COMMENT] われわれは生きている限り絶対に無仮定ではあり得ない、という基本的なことが失念されている。前提は given である。「どうして直接触れない外界の存在に確信が持てるのか」という質問はこれとは全く別の問題でつなげて論じるべきではない。「外界の存在の明証性の根拠は個々人にとって何であるか」というのが質問であるが、それへの答は「明証性を疑えばその個人の存在が危くなる」ということで十分である。

47 世界定立が停止される以上、還元のものち「現象学的余剰」として得られる意識も世界内的な意識ではなく、世界さえも志向的相関者としてもつ超越論的意識、「純粹意識」に他ならない。この超越論的意識の志向構成作業の錯綜を解きほぐし、そこからいかにして世界といった意味が形成されてくるかを見極めようというのが、超越論的還元の目的である。

48 メルロー・ポンティによると「現象学的還元は「負わされて条件付け」を「意識された条件付け」に変えようとすることであるが、だからといって条件付けられていることを否定しようというのではない」

超越的存在の定立にストップがかけられたいま、対象がイデア的かレアル的かという区別は本質的意味を持たない。およそすべての志向的对象の存在意味は、それを構成する意識の志向作業に遡って明らかにされなければならない。いかなる存在にもそれが意味を持つ限り必ずそれに対応する意識の構成作業があり、その作業においてそれがそのような意味を持つものとして所与となるのである。

49 こうして存在の意味に関するあらゆる仮定、先入見が還元によって排除され世界内で経験されうるすべての存在者の本質的区別と構造は、それらの存在者が与えあれる様々な意識の作業にまで遡って問い直される。超越論的現象学こそ、「われ思う」に立ち還って一切の諸科学を基礎付け直すべき基礎学である。

51 [COMMENT] すべてに意識が関与すると考えるのは心理現象についての誤った見方であろう。無意識でも飛んできた石で怪我はするのだ。

イデーン第一巻は、純粹意識の一般的構造を、その志向作用、つまりノエシスの契機と、そこで志向される対象、つまりノエマ的契機との相関関係として組織的に解明しようとする試みであった。

III 生活世界の現象学

- 53 1916年、フッサールはフライブルグ大学に移り、超越論的現象学の構想に反省を加え始め
54 る。イデーンにおいては、超越的還元をする主体が恰も超越的存在であるかのように見える。
その理由は自然的態度と自然主義的態度の無反省な混同による。越えられるべきであったの
55 は、実は自然科学のように自然を客体化して観る「自然主義的態度」だったのだ。
- 自然主義的世界は排除されるがそれで無世界的な主観性の領域に立つわけではなく。むしろ
56 そうした客体化に先立つ自然な世界経験、世界内存在といってよいもの、が恢復される。自
然的な日常的経験において生きられる世界を「生活世界」と呼ぶ。これをも臆見（ドクサ）
と呼ぶならば、それは根源的臆見（ウアドクサ）であり、もはやそれ以上越えることの出来
ないものである。
- 57 ここに来てフッサールの考えは大きく転回した。哲学定反省とは、超越論的主観性の立場に
身を置くことではなく、われわれの素朴な日常的経験、不断は反省されることもない自然的
態度を振り返ることに他ならないことになる。メルロー・ポンティの表現を借りれば、「最
初の哲学的行為とは、客体世界の手前にある生きられる世界に立ち戻ることであり」「真の
哲学とは、世界を見ることを学び直すこと」である。この主題が展開されるのが「ヨーロッ
パ諸学の危機と超越論的現象学」である。
- 58 近代科学は、原理的な根拠付けよりも、実用的な効果を追い、学の理想を見失ってしまった。
現実には「より有益」にはなったが、だからといって決して「よりよく理解される」よになっ
たわけではない。実証主義は形而上学を切り捨てることで理性の問題を切り捨てそこから逃
避した。理性的存在者であることを自らの本質としてきたヨーロッパ的人間が自己への信頼
を失ったことでもある。
- 59 フッサールによれば、われわれが通常「それ自体で存在し、真であり、客体的である」と信
じている世界は、実はすでに歴史的に沈殿した客体化的認識作用による理念化の成果なので
あり。われわれの生活世界の上に構築された主観的形象にすぎない。
- 60 真の客体的世界なるものは、原理的に知覚不可能であり、それ自身怖じたい存在においては
経験されることのない理論的構築物にすぎない。生活世界に着せられた「理念の衣」にすぎ
61 ないが、それによって生活世界が蔽れ見失われることになった。自然の理念化あるいは数学
化によって、われわれの直接的経験の世界がおおわれてしまった。客体的世界の発見は生活
世界の隠蔽となった。超越論的現象学箱の理念の衣を排除することによって根源的な生活世
界に立ち還り、そこから逆にこの理念の生成を開明しようとする。
- 62 デカルトは徹底した方法的懐疑に立ったにもかかわらず、数学的合理性によって認識される
「客体的合理的世界」を無反省に想定してしまった。
バークリーとヒュームは懐疑論によってこの「独断的客体主義」を根底から揺さぶった。し
かし、外的世界の存在を無条件に前提として、意識の構成作業を感覚与件の集合としてしか
考えなかった。
カントは「感覚与件の実証主義」を乗り越えたが、構成の基本的カテゴリーを既成の数学や
論理学から導入することに何の疑いも持たなかった。こうして真の無前提の立場に立ち得な
かった。つまり、常に客体主義的先入見に妨げられて超越論的課題の徹底的遂行は貫徹され
なかった。
- 63 そこで、現象学的還元の第一歩は原理的に近く不可能な客体世界から直接直観に与えられる
生活世界に立ち戻ることである。しかし、そこまで立ち戻ると、意識の志向性と書こう精査
業といった概念や分析そのものが効力を失うのではないか。
- 64 65 実は、世界は一切の個別的経験に先立って「いつもすでに」与えられており、個別的経験の

ありようを導いてくれる。世界は前もって受動的にわれわれに与えられている。世界とは薬手の存在者がそこから理解され、そこへ向けて理解される「熟知性」の基盤なのである。

66 「われ思う」というような顕在的な意識作用、定立的な「志向性」に先立って、その根底に
67 すでに潜在的に匿名で働いている構成機能がある。これをフッサールは「作動しつつある志
68 向性」と呼ぶ。受動的総合が働いている。このような受動性の現象に着目し「発生的現象
69 学」の領野を開拓したところに後期思想の大きな特徴がある。もはや「われ思う」の主体で
70 はなく「われなし能う」の主体であるような身体的主観性が問題となり、ここに「身体性の
71 現象学」が成立する。

68 フッサールの後期思想のもう一つの柱は「相互主観性」(間主観性)である。生活世界は決
69 して各自的な世界に尽きるものではなく、常に多数の主観による共同主観的構成に基礎づけ
70 られている。

哲学的主体が現象学的反省によって見いだすのは、この世界への自己自身の受動的な内属なのである。

IV 実存の現象学

80 フッサールが考えているような意味の志向的体験の分析では尽くしえない存在もあるのだ。
81 例えば「不安」などという体験はいかなる志向的对象をも持たないから志向的体験ではあり
82 得ない。そしてこの不安において開示されるものこそ、構成的主観の存在事実には他ならない。
83 ハイデガーによれば超越論的構成の座としての主観の存在は実存の遂行によってのみ開示さ
84 れる。構成的主観が世界内部的な存在者でないことは認めるがだからといってこの構成的主観
85 が存在者ではないということではない、むしろ「世界」がそこで構成されるような存在者の
86 在り方をこそ問う必要があるのだ。事実的に存在する人間的現存在の在り方が、そのまま超
87 越論的構成の可能性を蔵し手いるのだが、そのような構成的主観の在り方を、s j つぞんの
88 遂行そのものを通して開明しようというのがハイデガーのいう基礎存在論の意図するところ
89 なのである。

84 フッサールはハイデガーによって超えられたと断じて良いわけのものでもない。ブリタニカ
85 論文の執筆にあたってはその場所柄すでに考え抜かれた超越論的現象学つまり、構成的現象
86 学の立場を貫こうとした。「デカルト的省察」でもそうだった。だが遺稿によって知られる
87 1910年代後半以降のフッサールには「生活世界の現象学」にまとまる思索のモチーフがすで
88 に熟してきている。しかも、ハイデガーが決定的な影響を受けたのは明らかにこの時期なの
89 であるから彼らの関係を単純に「現象学から存在論へ」ないしは「現象学から実存哲学へ」
90 と片づけることは出来ない。

88 ハイデガーによれば、存在者を存在者たらしめる「存在」Sein、したがって存在する当のもの
89 とは明確に区別されねばならない存在の意味を問うためには、どれほど漠然とではあれ
90 「存在とは何か」ということを理解している存在者、つまり人間存在を手掛かりにするほかに
91 ない。人間だけが存在の意味を問いうるから、「存在」の意味が自らを現す「場面」Daであ
92 る：そこで人間は「現存在」Dasein と呼ばれる。そのためには現存在の実存、つまり「その
93 存在を己の存在として存在しなくてはならない」という固有の在り方を分析し現象論的に還
94 元しなくてはならない。そこで「存在と時間」上巻は実存の分析論となった。下巻では「存
95 在一般の意味」を問うはずであったが、その刊行は結局断念され、こうして「存在と時間」
96 は実存哲学の書と見られることになってしまった。

90 しかし、その存在論の実現には理性主義を真っ向から否定しようとするキルケゴール的いわ

91 ゆる実存的な思想動機と理性の復権を目指す現象学的動機が絡み合っている。この二つは両
92 立できず、したがって下巻は書かれなかったのである。
そもそも「存在と時間」はあわただしく書かれ、さほど彫琢を経た書ではない。

V サルトルと現象学

101 フランスで岩礁学は本来の軽快さと開放性を恢復する。フッサールは一切の先入主を廃して
事象そのものに迫る方法論的態度が現象学だったはずだが、重厚な第一哲学にまで高められ
てしまった。

102 サルトルはハイデガーと初期フッサールに依拠した(現象学的には脇道である)がメルロー・
ポンティはフッサールの後期思想に親しんでそれを展開していった。

108 サルトルの考えによれば、「われ思う」というのは反省によって始めてとらえられる意識の
構造であって、この「われ」なるものは、実は不純な反省作用によって、反省される意識の
うちに二次的に構成されるひとつの超越的对象にすぎない。われわれが浄化作用的な反省に
よって復元する第一次的な非反省的意識は、端的に対象へ向かう志向作用以上のものではなく、
「われ」などによって住みつかれていない非人称的なものである。

113 心理学が事実認識のみに頼るならば、それは相互に何の連絡もない雑然たる事実の寄せ集め
114 に終わるわけで、人間の心的生活の全体の中での情動とか知覚の役割などおよそ問題にし得
ないだろう。

心理学のこうした方法論的な不備を衝き、その改革を提唱したのがフッサールなのである。
事実と本質は通約不可能であり、事実認識をいくら集めても本質には達しない。したがって、
事実経験とははっきり区別される本質経験—「本質直観」を認めざるを得ない。

118 しかし、晩年のフッサールは自然的態度のうちに全く根を持たない超越論的動機からする超
越論的還元の可能性に気づいていたろう。一切的世界的な拘束を脱した純粹意識の立場に
一挙に身を移して、すべての意味をア・プリオリに直観するような哲学的反省は不可能であ
る。

ハイデガーは「*ほんざいと時間*」で哲学的認識に一切の事実認識、経験科学的認識に対する
絶対の優先権を認めているが、徹頭徹尾世界のうちに定位された哲学べき認識にそういうこ
とが許されようはずもない。つまり、ハイデガーは現象学に忠実でなかったわけだ。

VI メルロー＝ポンティと現象学の現状

126 彼の学位論文(1945)は明らかに後期フッサールの「生活世界の現象学」の影響圏に属する。

「記述することが問題であって、説明したり分析したりすることは問題では *mp128* ない」と
いう現象学の基本主張の意味することは、まず一切の科学的説明を否認すると共に哲学的
反省的分析をも排し、世界は一切の分析に先立ってまずそこにあるもので離「構築されたり
構成されたりすべきものではなく、あるがままに記述されるべきもののだ、知覚に絶対的優
先権を認めようということなのである。人間が世界内に存在するとは世界が知覚に与えられ
るということだ。

130 哲学的反省とは、決して世界から身を引いて意識のうちに引きこもることではなく、「われ
われを世界に結びつけている志向的内とを出現させるためにそれをゆるめる」ことなのだ。
還元とは世界とわれわれのなれあいの関係を断ち切り、世界を逆説としてみることにほかな
らない。

- 134 後期のフッサールにとってそうであったように「最初の哲学的行為は、客体的世界の手前にある生きられている世界に立ち戻ること」である。
- 138 経験主義と趣致主義との血縁関係は考えられているよりはるかに深い。そのちがいは、一方が絶対的真理を素朴に自然のうちに据えているのに対して、田尾右派普遍的な構成主観に真理認識の絶対的能力を付与している、という点だけである。何れも食節の経験を水平化し、知覚野を超えた何らかの「世界そのもの」に定位している。だが、われわれが自然的態度において与えられるがままに見てみれば、地平線ある月は依然として天心にあるときよりは大きいのだ。
- 144 最晩年のフッサールの弟子フィンクによれば「自然的世界の全体性についての問題を、その窮極まで辿ることは、ついには〈超越論的態度〉への移行に根拠を提供することになるのだという次第を、われわれは自然的態度を離れなくても示すことが出来るであろう」
- 146 知覚経験は原理的に「われ知覚す」ではあり得ず「私のうちの誰かが知覚する」といわざるを得ない。メルロ・ポンティによれば、知覚経験のこの匿名な主体は「自己の身体」に他ならない。この身体こそ世界へのわれわれの投錨であり、世界内存在の媒質であり、世界へ向かう絶えざる運動の移行点である。
- 147 神経系の本質的機能は特定の感覚内容を受容したり産出したりすることではなく、与えられた興奮を分化し、ひとつの安定した全体へ形態化し構造化してゆくことだと考えるべきだろう。神経系のこうした形態か作用は、系統発生的に見られるから、一般に刺激とゆきたいとの間に一対一的対応関係を認めようとする考えは成り立たない。